

契約と願い



「お茶に付き合っていただけかしら？」

独り言のようにそう呟くと、彼がすうっと姿を現した。

爽やかな午後のひととき。

お気に入りのティーカップにお気に入りの紅茶を入れる。カップの隣には一切れのケーキ。

「さあ、座ってちょうだい」

私は彼に向かって微笑みかけた。

彼はいつも同じ黒いスーツを身につけている。埃なんて付いていたことがない。

いつも同じ 不思議な、深く吸い込まれてしまいそうな色の 黒いスーツ。

悪魔だから……。そんなものなのかしら？

「お前が満足して人生を終えるために必要なことだと言うなら、いただく」

彼は私をじっと見つめたまま偉そうに言った。

「ふふ。そうね、お願いするわ」

返事を確認すると、彼は私の正面の椅子に腰掛けた。

悪魔の彼と初めて会ったのは、確か私が6歳の時。

そして、私が自分の魂と引き替えに願い事をしたのは高校生の時。

死ぬときは満足して死にたいと願った。

当時、病気で何年も闘病生活を送っていた母をなんとか上手く助けることはできないかと、頭を捻ってそう願ったのだ。でも悪魔と契約した後、程なくして母は息を引き取ってしまった。

その時は悪魔の事を思い切り叩き、詰った。こんなんじゃ満足して死ぬことなんてできない。契約は破棄だと。

すると悪魔はぞっとするほど冷たい目で私を見据え、同じくらい冷たい声で言った。

「どれくらい母親を生き長らえさせたら満足だったんだ？ お前が『満足したわ。もう殺して頂戴。』と言うまでか」

私は悪魔を憎んだ。母の後を追って死ぬことなど忘れるくらいに。

それから悪魔は事あるごとに私の前に現れては、横柄な態度で満足のいく人生とはどんなものであるのかを語った。

恨み、罵りながらも、良い事ばかりが続く人生などで満足できはしないと言い放つ悪魔の言葉通り、私は母を失った悲しみからも立ち直り、良いことも悪いこともある平々凡々な人生を送った。

結婚して子供ができて、孫も生まれて。夫は3年前に天に召されたが、励ましてくれる子供や時々現れては憎まれ口を叩いていく悪魔のおかげで寂しくはなかった。満足のいく人生を送れたと思う。

「あなたのおかげで、今までとても幸せだったわ。ありがとう」

そう言うと、彼は嬉しそうに微笑んだ。

あら、そんな優しい笑顔なんて初めて見たかも。

そう思いながらおかわりを用意しようと立ち上がった時、意識が途切れた。

いつの間にか壁も天井も床すらもなく、ただうすぼんやりとした空間に浮かんでいた。
とても不思議な感覚だった。体が軽い。ふわふわとして頼りないくらいだ。
魂だけの存在になった私は、悪魔と契約を交わした時の姿になっていた。

「契約が執行される時が来たようだ」

目の前にその悪魔がいた。

契約が執行されるということは、私は満足して死ねたということね。

「本当にありがとう。」

そう言うと、彼は首を振った。

「違う。私は何もしていない。お前の幸せは、お前が自分で掴みとったものだ。安心しろ」

そしていきなり私を抱き締めると、

「契約が果たされたのは、最後にお前がお茶に誘ってくれた時なんだ。間に合ってよかった」と言った。

彼はいつものスーツ姿だったけれど、抱き締められた私の目の前に、スーツと同じ艶やかな黒色の翼があった。

その奥に見えるほんの僅かな白い羽毛。

何かを忘れていたような痛みが私を襲う。

「これでお前の魂は私の自由にできる。これから天国に行って、お前を再び人間に生まれ変わらせるから。そして私はまた願いを聞きに行く」

彼はそう言って、私からそっと離れた。

「でも。生まれ変わったら、私はあなたの事を忘れてしまうでしょ」

この痛みの原因はたぶん…。

「大丈夫」

彼が私に微笑みかける。

「今までだって何度もうまくいってるんだ。これからだってきっと…。でも天国に行く前に、もうしばらくこのままでいさせてくれ」

彼は私をそっと抱き締めた。

彼の腕は優しく、そして不思議なくらい懐かしかった。